コマンド・ガールズ　1

ケネス・ハートフォードの映画”HELL SQUAD”より

――冷戦時代から中東は当時から世界の火薬庫だった。
ソ連の後押しを受けたテロリストたちと、西側と同盟する勢力とが、
砂漠のあちこちで衝突していた。
テロリストの一味が、米国大使の子息を誘拐する事件は、そ
んな最中に起こった。
テロリストの要求に屈すれば、世界は破滅へと向かうことは明らかだった。
だが、悪が栄えた試しはない。
世界最強の美女たちが、
邪悪な企てを阻止すべく立ち上がるはずだった。

登場人物

ジャン　27歳。元ＣＩＡ。身長１７４センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。

ティナ　25歳。いちばんの長身で１８０センチ。北欧系の端正な美女。ちょっと皮肉屋だが冷静なリーダー格。

モーリーン　25歳。ショートカット。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼。身長は１７８センチ

リサ　20歳。赤毛。十三歳で家出。パンク歌手のような鋭い顔つきに、油断のない向上心に溢れた眼。

ローレン　21歳。東部の出身。マサチューセッツ工科大学中退。典型的なワスプ顔で教養がある。

キャシー　18歳。カンザス出身。田舎くさく、白い肌にちょっとだけソバカスが残る。１メートルを越える、いちばんの巨乳。

1

ラスベガスは、金の世界だ。ありあまる富を手にした連中が、スリルと快楽を求めて集まってくる。

ラスベガスのショーガールたちもまた、わずかな成功の手づるを求めてやってくる。若さと、選ばれた女性だけが持ちえる美しい肉体を武器にして。

しかしやがて、ラスベガスのステージから、ハリウッドやブロードウェイへとステップアップ

する者は、ほんの一握りでしかないことを、彼女らは悟る。成功の見込みがないとなると、ショーガールとは、金銭を得るだけの肉体労働者にすぎないことが分かってくる。
ステージを負えた二十人のショーガールたちが戻ってきた楽屋は、たちまち華やかな倦怠感に包まれた。いずれもブロンド、長身、ＤＤサイズの乳房、長いしなやかな脚。神が造りたもうた女性美の粋を集めた女神たち。
「お金も名声も、さっぱりね」
ティナが舞台衣装を脱ぎ捨て、下着だけになって鏡に向かい、メークを落としながら呟いた。
二十五歳。ショーガールのなかでいちばんの長身で１８０センチ。北欧系の端正な美女である。ちょっと皮肉屋だが冷静なタイプで、自然と美女たちのリーダー格になった。
「来る日も来る日も同じことのくり返し……虚しいわ」
「うんざりよ」
モーリーンはブラウンの髪にブラシをあてながら相槌を打つ。ティナと同じ二十五歳。ラテンの血が混じった情熱的な潤んだ眼がセクシーだった。上背も、ティナより少し低いが、１７８センチあった。
「ベガスはもっとスリリングな場所だと思ってたけど……退屈ね。田舎にでも帰ろうかな」
二人はともラスベガスで踊り初めてから七年。そろそろ可能性の限界が見えてくる年齢だ。
「私はまだ、諦めないわ」

赤毛のリサはタオルで盛り上がった胸に浮かぶ汗を拭った。二十歳。十三歳で家出し、さまざまな苦労を重ねてきた。イギリスのパンク歌手のような鋭い顔つきに、どこか油断のない向上心に溢れた眼をしていた。
「三十歳まではがんばるつもりよ」
「そうよ、夢を捨ててはだめ」
十八歳のキャシーがきれいな長い脚を組み直してうなずく。カンザスから出てきたばかり。メークで隠しているが、白い肌にちょっとだけソバカスが残っている。１メートルを越える、二十人のなかでもっとも大きな胸が、どこか田舎くささい雰囲気とマッチして微妙な色気を醸しだしていた。
「諦めるのはまだ早いわ」
「人間、どこかで人生を選ばなきゃならないのよ」
二十一歳のローレンがペットボトルの水を飲み干した。東部の出身。マサチューセッツ工科大学まで進みながら退学してベガスまで流れてきたのは、両親がそうとう問題があったらしい。典型的なワスプ顔で、いちばん教養があった。
「時間を無駄にはできないわ」
「そう、そのとおり！」
ティナは笑った。

「どの時点で出世に見切りをつけて、成功しそうな男をゲットすることに専念すべきか。難しい問題よね」
「男ねえ……」
モーリーンは頬づえをついた。
「男しだいの人生なんて……悲しいけど、そのとおりだもんね」
「そんなはずないわよ」
キャシーが口を尖らせる。
「私たちだって、自分たちの力で何かをできるはずだわ」
「そうね……」
ローレンがくすくす笑った。
「お金のありそうないい男の股間を撫でる。お金のありそうな醜男は金だけ出させてやらせない。お金のないいい男は、こっちが困らない程度に貢ぐ。お金のない醜男が迫ってきたら」
「股間に一撃！」
ティナの声に、女たちは華やかな笑い声をあげた。

その頃、ステージ脇のバーで、ジャンがグラスを傾けていた。
「なかなかいい娘を揃えたな、ジャン」

カウンターのなかで五十がらみのバーテンダーが言った。
「さすがだ」
「ありがとう、ジョー」
ジャンは婉然と微笑んだ。
二十七歳。この仕事を始めてから二年。前歴は誰も知らない。
身長１７４センチ。鮮やかなストレートの金髪。プレイメイトを思わせるワイルドな美貌。スレンダーだが、筋肉がしなやかに発達したフィットネス系のボディ。豊かに盛り上がった乳房。二十人のダンサーよりもホットだったが、頑に舞台に立とうとはしない。
元はダンサーだろう、というのが大方の予想だったが、いや、あの歩き方はダンサーやモデルじゃない、エアロビのインストラクターかも、という意見もあった。身のこなしにスキがなく、誰も手を出せないでいた。
「よう」
ジャンの肩に手が置かれた。振り返ると、趣味の悪いスーツ姿のアジア系の男が二人、立っていた。
「何か？」
「……いい女だな」
角刈りの男が、にやにやと卑猥な笑いを浮かべて、ジャンの肩を撫でた。

もう一人、アフロヘアの男が隣のスツールに腰掛け、覗き込むように顔を近づけてくる。
「あの……、ご注文は？」
バーテンが割り込んだ。
「失せろ」
角刈りがすごんだ。バーテンは遠慮がちに、しかし決然と言った。
「お客さん、彼女はこの店のスタッフなんだ。変な真似はしないでくれ」
「失せろって言ってるんだよ」
アフロヘアが怒鳴った。二人の視線がバーテンに向けられた。
その隙に、ジャンは立ち上がり、歩み去ろうとした。
「おい、まて！」
アフロヘアがジャンの腕をつかんだ。ジャンは振り返った。左手で男の腕をつかみ返し、右手で襟首をつかんだ。
そのまま、男の顔面をカウンターに叩きつけた。
鮮やかな早業だった。
角刈りが立ち上がり、ジャンの胸ぐらをつかんだ。
「てめえ、何を……」
角刈りの脅迫の言葉が途中で途切れた。

ジャンの右脚の膝が、角刈りの股間に食い込んでいた。角刈りは、両手で股間を抑え、床にくずおれた。
「てめえ……！」
アフロヘアが立ち上がり、ジャンの腕をつかんだ。ジャンはすかさず男に向き直り、顎に裏掌をぶちあてた。男は棒立ちになった。つづいて、彼女はソフトボールのピッチャーのように、腕をぐるりと回転させて、裏掌を男の脚と脚とのつけ根に突き上げた。
「ぎゃ！」
男は棒立ちのまま、股間を両手で抑えた。
「女を甘く見ると……」
ジャンは、彼の両耳を挟み込むようにチョップを浴びせた。男は両手で両耳を抑えた。がら空きになった股間に、爪先をたたき込む。男は白眼を剥き、硬直した。三度たてつづけに蹴り上げた。男の睾丸は二つとも潰れた。
「あんたが男でなくなっちゃうわよ」
床に這いつくばって痙攣するアフロヘアに、ジャンは唾をはきかけた。
角刈りがようやく立ち直った。左手で股間を抑え、苦しげによたよたと迫ってきて、右手でパンチを浴びせようとした。ジャンは簡単に弱々しいパンチをかわし、男の背後にまわって左手で襟首をつかんで壁に押しつけ、右手で股間をぎゅっと掴んだ。男が絶叫する前に、左手で男の額

を壁に打ち当てる。男は失神した。くずおれそうになるところを、右手でつかんだ睾丸をひねりあげ、一気に握り潰した。
男は血反吐をはいて、紙のようにへなへなになった。
ジャンの背後に人影が立った。
気配に振り向き、さっとファイティングポーズ。
「ま、待てよ」
男が両手をあげてジャンを制止した。
「もういい、ジャン。テストは合格した」
「ジャック！」
ジャンは叫んだ。
「なんの真似よ！」

「すまなかった」
ジャックは、不機嫌にグラスを飲み干すジャンの肩に手を置いて弁解した。
三十歳。東部の名門出身らしい、育ちのよさそうな端正な美丈夫だ。
「テストってどういう意味？」
ジャンはジャックの顔を見ないようにして言った。

「つまり……君の腕が落ちてないか、試させてもらったんだ」
「つまり、こいつらはあんたの部下？」
ジャンは、睾丸を潰され、血反吐をはいて床で痙攣している男たちを指さした。
「いや、雇っただけだ」
ジャックは入口のほうに向かって合図した。屈強そうな男が四人現れ、二人の瀕死のアジア人たちを運び出した。
「人間のクズどもだ。君の腕が落ちてないければ、ああなることは分かっていた。優秀な部下たちを、そんな目に合わせるわけにはいかないよ」
「二年も姿を消しておいて、いきなりご挨拶じゃない？」
ジャンは固い表情を崩さぬまま言った。
「外国に行ってたんだ、秘密の任務でね」
セクシーな顔に、すまなさそうな微笑みを浮かべてジャックは言った。
「誰にも知らせるな、と上に言われたんだ」
「それで今頃なによ」
「君の力を借りたい」
「ごめんだわ」
「君は、今の仕事に満足している？」

ジャンは答えなかった。
「君は、国家のためにもっと大きな仕事ができるはずだ。ラスベガスの、ショーガールの口入れ屋なんかじゃなくて……」
「国家がなによ……私の人生は私が決めるわ」
「でも、刺激がほしいはずだ」
「ここはアメリカ一刺激的な場所よ」
「もっと刺激的な場所が、海の向こうにはある」
「どこよ」
「中東さ」

「みんな聞いて」
メークを落として私服に着替えたショーガールが、いっせいに楽屋の入口を見た。
「ジャン」
ショーガールのリーダー格のティナが立ち上がった。
「隣の彼は何者？　私たちのパトロンになってくれそうな人？」
美女たちがいっせいにくすくす笑った。
「私の旧友よ」

ジャンはにこやかに言った。
「私たちの助けが必要なんだって」
「どんな助け？」
ローレンが訊ねた。
「仕事（job）だ」
ジャックが答えた。赤毛のリサが茶々を入れた。
「まさか、お口でやる仕事（blowjlb）？」
「あんただったら、報酬抜きでもいいわよ」
モーリーンが色っぽく体をくねらせてが言った。みながまたドッと笑った。ジャックも笑いながら言った。
「君たちが求めているのは、金と名声、そしてスリルだ」
「そのために、カンザスから出て来たんだもの」
キャシーが腕組みをし、大きな胸をさらに押し上げながら言った。
「ここには、無さそうだけど」
「別の場所にはある」
ジャックは顔を引き締めた。リサが言った。
「どこよ？　ロスの裏通りなんてのはお断りよ」

「もっと危険な場所だ。報酬は成功したら、一人あたり五万ドル」
女たちがいっせいに口をつぐみ、息を呑んだ。
「その前に、二週間の訓練期間を設ける。君たちのなかから、六人を選抜する。ただし、訓練だけでも八〇〇〇ドルは払う」
「五万ドル……」
十八歳のキャシーがうめいた。
「私たちの……半年ぶんのギャラね」
リサが訊ねた。
「……その危険な場所ってどこ？」
「今は教えられない」
「そんなお金、誰が出すの？」
モーリーンの問いに、ジャックは言った。
「アメリカ合衆国政府だ」

「言っておくけど」
ジャンは、ジャックの逞しい背中を撫でながら言った。
「訓練に参加するかどうかは、彼女たち次第よ……私は、奨励はしないわ」

あ、とジャンは体をのけぞらせた。ジャックの指が、彼女の微妙な箇所を刺激した。
「分かってる」
ジャックは、ジャンの乳首を軽く舌で撫でた。ジャンはせつなげに、小さな悲鳴をあげた。
「この仕事には、世界の命運がかかっている。君でなければできない仕事だ」

翌朝。
「何人来るかな」
ジャックが呟いた。ホテルのエレベーターは、ロビー階に向かって下降していた。
「全員、来るわ」
ジャンは言った。
「彼女たちは刺激を求めている。それに女は、いざとなると、男より度胸が座るものよ」
「すべてのアメリカ女性が君と同じだったら、今頃世界は平和だろうね」
「世界を乱しているのは男だもの」
「そうかもしれない。だから、われわれアメリカ人が世界の面倒を見なければならない。馬鹿な男が多すぎるんだ」
「あなたたちの手に余る仕事は、私たちの出番ってわけね」
エレベーターが止まった。ドアが開いた。

色とりどりのセクシーなコスチュームに身を包んだ二十人のショーガールたちが吐き出され、ロビーはたちまち華やかな嬌声に包まれた。

だが、彼女らのセクシーな衣装は、無用だった。

バスに載せられた美女たちが向かった先は、中西部の砂漠地帯だった。彼女たちは全員、バスのなかで白いスポーツブラと、ジーンズ地のショートパンツ、スニーカーに着替えらせられた。

「ジャン」

バスに揺られながらティナが、延々と続く不毛の荒れ地を見つめて言った。

「どうやら、アラスカにサーモンフィッシングに行くわけでも、カリブ海にクルージングに行くわけでもないことは分かったわ。いったい私たち、どこに連れていかれるの？」

「砂漠よ」

「そこで訓練ってわけね……で、その後は？」

「その後も、砂漠よ」

砂漠に鉄条網か張りめぐらされた一角があった。

そのなかに、木製の小屋が並んでいる。

ゲートには、銃を構えた軍服の兵士たちが立ち並んでいた。

バスはゲートをくぐって止まった。司令部と書かれた小屋の前に、軍服の将校が二人、下士官が数名、そしてスーツ姿のジャックが立っていた。

「軍事施設とはね……」

ティナが呟いた。

「そうとう危険な任務なのね」

「五万ドルかあ……」

最年少のキャシーがうめいた。

「そうそう簡単にくれるなんて思ってもいなかったけど」

「おじけついたの？」

リサがからかった。

「まさか！」

キャシーは叫んだ。

「私、こう見えても、喧嘩に負けたことはないのよ。……男にもね」